

7. 完全間歇型一酸化炭素中毒の3例 一特にCT, MR所見について一

林 克二

(九州労災病院高気圧治療部)

【はじめに】間歇型一酸化炭素中毒(以下CO-中毒)に関する報告は多数あり, CTおよびMRに関する報告も散見される。しかし, 間歇型発生直後のCT, MR所見および間歇型発生後, 長期間に渡る, CT, MRの経時的な変化に関する報告は少ない。今回, H.B.O施行中に完全間歇型を発生した2例と, 完全間歇型発生後, 治療を行った1例の計3例について, CT, MRを経時的に撮り, 興味ある結果を得たので報告する。

【症例】急性CO-中毒発生直後より入院, HBOを行った症例は2例で, 1例は来院時淡蒼球にL.D.Aを認める重症例, 1例はCT上, 明らかな変化は無い軽症例と考えられた。間歇型発生の予防も含めて, H.B.Oは, 連日行っていたが, それぞれ21病日, 19病日に, 完全間歇型発生, その後のH.B.Oその他の治療に反応なく, 共にAkinetic mutismへ進行した。もう1例は, CO-中毒の診断を受けないまま, 23病日に完全間歇型発生後, 2週目に来院, H.B.O施行後, 軽度の改善を認めた。入院時, 完全回復時, 間歇型発生時および間歇型発生後は, ほぼ1カ月の間隔で, CT, MRを撮り, 臨床症状と比較した。

【結果】1)間歇型発生直後のCT所見は発生前と比し, 大きな変化は無く, 臨床症状が先行すると考えられた。2)間歇型発生後, 1カ月以内のCT, MRで, 白質の著明な変化が確認され, 臨床症状の悪化と一致した。3)改善が認められた症例では, CT, MRとも軽度の改善が認められた。4)H.B.O施行にもかかわらず発生した間歇型に対するその後のH.B.Oは基本的に無効と考えられたが, 症状の増悪, 進行を緩和する可能性はあると考えられた。

8. 急性一酸化炭素中毒症例の臨床的検討

野口照義 伊東範行 三上春夫
勝本淑寛 金子 克

(千葉県救急医療センター)

【目的】急性一酸化炭素(以下CO)中毒自験例の高気圧酸素治療(以下HBO)前各種検査結果とHBO回数や予後につき臨床的な面よりretrospective studyを行った。

【対象及び方法】昭和55年4月より平成元年3月末までの急性CO中毒53例。HBO3週間以内に治癒したC群34例と, HBO終了時点で症状の遷延・死亡例, 更に間歇型症状を呈したP群19例の二群に分け, 臨床所見, 検査結果を比較検討した。HBO(2 ATA60分)は可及的早期に, 1日1回, 3週間を原則としたが, 症状の残存例には更に1日1回, 3週間継続した。

【結果】死亡を含めたP群は, 急性CO中毒全体の35.8%で, 死亡4例が全体の7.6%であった。HBO前のGlasgow coma scaleによる意識レベルの平均は, C群 12 ± 3 , P群 8 ± 4 であった。Hb-COはC,P群間に有意差はなく, それぞれ $22.1 \pm 18.0\%$, $25.0 \pm 13.9\%$ であった。末梢白血球数は二群共に増加し, C群平均が $12470 \pm 4910/\text{mm}^3$, P群 $18850 \pm 9860/\text{mm}^3$ とP群が有意に多い。動脈血中重炭酸イオン濃度はC群 $21.73 \pm 3.62\text{mEq}/\ell$ P群 $19.29 \pm 4.34\text{mEq}/\ell$ とP群が有意に低い。またP群では脳波, CT上に異常所見を認める割合が高い。C, P群の平均HBO回数は, それぞれ 25 ± 17 回, 62 ± 25 回であった。重症例や間歇型発症懸念のある症例には, 6週間の治療を基本とした昭和59年以後(後期)に間歇型の発症例もなく, それ以前(前期)に比して治療成績も良かった。

【結論】低意識レベルで, 脳波やCT上に異常所見を呈し, 代謝性アシドーシス, 白血球数増多を示す症例では, 続発症に移行する可能性が高い。このような症例には, 可及的早期よりHBO1日2回, 2~3週間施行し, 症状の残存する症例には, 更に1日1回3週間継続することが望ましい。